

# 「ネロの迫害」神話

## —B. D. Shawの論文をめぐって

島 創平

キーワード：ネロ、タキトゥス、キリスト教徒迫害、Christiani、「神の敵」

Nero, Tacitus, persecution of Christians, Christiani, 'enemy of the God'

### 序論—問題提起

ローマ帝国とキリスト教の問題を考える上で、64年に起こったとされる第5代ローマ皇帝ネロによるキリスト教徒迫害は、その後4世紀初めまで続く、ローマ帝国政府の反キリスト教政策の端緒と位置づけられる。一般的な通説によると、64年7月に起こった大火は、首都ローマの大半を壊滅させたが、大火後ローマ市民の間に、ネロ自身が放火を命じたという噂が広まった。そこでネロは、この噂を打ち消すために、当時ローマ帝国内に広まりつつあったキリスト教徒に放火の罪を着せ、多くのキリスト教徒がネロによる迫害の犠牲となった。この迫害の中で、使徒ペトロとパウロも殉教し、ペトロは逆十字架に磔にされ、パウロは斬首刑に処された。

このように、ローマ大火とキリスト教徒迫害は、母殺しと並んで、ネロの犯した最大の悪行とされ、特にキリスト教世界では、ネロはローマ皇帝の中で初めてキリスト教徒を迫害した、歴史上最悪の「暴君」と言われている。

しかし、一般的に普及しているこのような通説には、確かな歴史的根拠が乏しく、その史実性には大きな疑問がある。ペトロやパウロの最期については、その大部分が信頼性に欠ける後代の伝承によるものであり、彼らがどのような最期を迎えたのか、歴史的にはほとんど分かっていない。また、ローマ大火とキリスト教徒迫害の問題については、両者を結びつける歴史的根拠としては、後述するタキトゥスの『年代記』15. 44の記述がほとんど唯一の史料であり、これについても従来から様々な問題が指摘されている。

B. D. ショウは、2015年に *Journal of Roman Studies* に掲載された論文（‘The Myth of the Neronian Persecution’）において、ネロによるキリスト教徒迫害について、従来の定説をほぼ完全に否定する<sup>(1)</sup>。ペトロやパウロの「殉教(?)」は、ローマ大火とは無関係であると考えられるし、キリスト教徒迫害も、1世紀半ば当時のローマ社会やキリスト教会の

歴史的状況を考慮すると、タキトゥスの記述には極めて疑わしい点が多々ある。ネロを最初のキリスト教徒迫害帝と位置付ける事も、これをローマ政府の反キリスト教政策の始めとする事もできない<sup>(2)</sup>。

以上のようなショウの主張は、いろいろ問題もあるが、他方初期キリスト教とローマ社会の問題を考える上で、重要な手がかりを提供していると思われる。本稿では、ショウの論文の論点を整理し、その再検討を通して、初期キリスト教とローマ社会の問題を考えていきたい。

## 本論1 ペトロとパウロの最期の問題

まず最初に、使徒ペトロとパウロの最期について、検討したい。新約聖書においては、彼らがいつ、どこで、どのように最期を迎えたかについては、全く述べられていない。前述したように、後代の伝承では、二人共ローマで、ネロ帝による迫害下に、ペトロは逆十字架刑で、パウロは斬首刑で殉教したと言われているが、これは二人の死を、イエスの十字架刑と洗礼者ヨハネの斬首刑に重ね合わせる事を意図していると考えられる<sup>(3)</sup>。

### ①ペトロの最期について<sup>(4)</sup>

新約聖書では、ペトロはエルサレムでの使徒会議（48/49年頃）以後、彼についての直接的記述は途絶える<sup>(5)</sup>。ただし、パウロはアンティオキアで、食事における異邦人との同席問題をめぐって、ペトロと衝突した事を報告している<sup>(6)</sup>。これはエルサレム会議後、約1年後の出来事と推定されている。一方、ヨハネによる福音書21章では、ペトロの殉教による死を暗示するイエスの言葉が伝えられている<sup>(7)</sup>。

ペトロがローマで殉教した事、逆十字架刑に処された事は、すべて後代の伝承による。ペトロの死について、最も早く言及しているのは、95年頃書かれたと推定される『クレメンスの手紙—コリントのキリスト者へ(1)』5.4~7で、ここではペトロとパウロの殉教について暗示的に述べられているが、二人がどのような死を遂げたかについては、具体的には書かれていない<sup>(8)</sup>。

テルトゥリアヌスの『異端者への抗弁』36.3（200年頃）には、ペトロが十字架刑に処された事が示されているが、場所と時については、言及されない<sup>(9)</sup>。4世紀の教会史家エウセビオスは、3世紀の護教家オリゲネスの『創世記講解』（現存せず）を引用して、ペトロがローマに来た後、彼自身の要望により逆十字架にかけられた事を報告している（『教会史』3.1.2）<sup>(10)</sup>。またエウセビオスは別の個所で、ペトロとパウロがネロの時代に殉教したと述べている（『教会史』2.25.5）<sup>(11)</sup>。さらに外典の『ペトロ行伝』では、ペトロの殉教の場面において、ペトロが自らの意思で逆十字架に付けられた事が詳しく述べられている（35~

41)<sup>(12)</sup>。

以上の後代の伝承においては、いずれも64年の大火との関わりについては、何も述べられていない。また、ペトロのローマ滞在や、逆十字架刑についても、信頼できる確かな典拠はない。ショウは、ペトロは50年代半ばに、ユダヤで病死したのではないかと推定している<sup>(13)</sup>。

## ②パウロの最期について<sup>(14)</sup>

パウロはエルサレムでユダヤ人に逮捕され、騒乱罪と神殿冒瀆の罪でローマ総督に告訴されたが、彼はローマ市民特権を行使してローマ皇帝に上訴し、ローマに護送された<sup>(15)</sup>。彼がローマに護送されたのは59年頃と推定される。ローマでは、パウロは恐らく一定の監視の下、ある程度の自由を許され、使徒言行録によると丸2年、ローマに滞在した<sup>(16)</sup>。パウロの死については、使徒言行録は何も述べていないが、ショウは、パウロはおそらく60～61年頃に処刑されたと推定する<sup>(17)</sup>。処刑の理由は、彼の告訴理由であった騒乱罪であり、彼は通常の裁判手続きに従って、ローマの役人により処刑されたとと思われる<sup>(18)</sup>。それゆえパウロの死は、キリスト教徒迫害とも64年の大火とも直接関係はない。

以上のように、ネロ治世下に、ペトロとパウロが死んだのはほぼ事実と思われるが、彼らの死を、ネロのキリスト教徒迫害による「殉教」と解釈するのは、必ずしも事実と断定することはできないのではないかと思われる。

## 本論2 タキトゥス『年代記』15. 44.の問題

次に、ローマ大火とキリスト教徒迫害を結び付けた、タキトゥスの記述を参照したい。タキトゥスは『年代記』第15巻38～43節で、64年のローマ大火について述べた後、続く44節の中で、以下のように述べている。

しかし元首の慈悲深い援助も惜しめない施与も、神々に捧げた贖罪の儀式も、不名誉な噂を枯らせることができなかった。民衆は「ネロが大火を命じた」と信じて疑わなかった。そこでネロは、この風評をもみ消そうとして、身代わりの被告をこしらえ、これに大変手の込んだ罰を加える。それは、日頃から忌まわしい行為で世人から恨み憎まれ、「クリスチャン (Christiani)」と呼ばれていた者たちである。この名の開祖 (auctor nominis eius) であるクリストゥス (Christus) は、ティベリウスの治世下に、総督 (procurator) ポンティウス・ピラトゥスによって処刑されていた。その当座は、この有害極まりない迷信 (exitiabilis superstitio) も、一時鎮まっていたのだが、最近になって再び、この禍悪の発生地ユダヤにおいてのみならず、世界中からおぞましい破廉恥なものがことごとく流れ込んでものではやさ

れるこの都においてすら、猖獗を極めていたのである。

そこでまず、信仰を告白していた者が審問され、次いでその者らの情報に基づき、実におびたしい人 (*multitudo ingens*) が、放火の罪というよりむしろ人類憎悪 (*odium humani*) の罪と結び付けられたのである。彼らは殺される時、なぶりものにされた。すなわち、野獣の毛皮をかぶされ、犬に噛み裂かれて倒れる。〔或いは十字架に縛り付けられ、或いは燃えやすく仕組まれ、〕そして日が落ちてから夜の灯火代わりに燃やされたのである。ネロはこの見世物のため、カエサル家の庭園を提供し、そのうえ、戦車競技まで催して、その間中、戦車駆者の装いで民衆の間を歩き回ったり、自分でも戦車を走らせたりした。そこで人々は、不憫の念を抱きだした。なるほど彼らは罪人であり、どんなむごたらしい懲罰にも価する。しかし彼らが犠牲になったのは、公共の利益 (*utilitas publica*) のためではなく、ネロ一人の残忍性を満足させるためであったように思われたからである (國原吉之助訳。一部訳を改めた<sup>(19)</sup>)。

以上がタキトゥスの記述であるが、この個所について、問題点は二つある。

問題1：ローマ大火とキリスト教徒迫害を結びつけた記述は、タキトゥスだけであり、ローマの歴史家やキリスト教の作家達の著作には、タキトゥスを根拠とする作家を除き、両者を関係づける記述は見当たらない<sup>(20)</sup>。

問題2：タキトゥスがここで描いているキリスト教徒の描写は、タキトゥス自身が生きた2世紀初頭のローマ人のキリスト教徒像に基づくものであり、ネロ時代の1世紀半ばの状況を反映していない。

### ① スエトニウスの叙述

まず、大火とキリスト教徒迫害について、タキトゥス以外のローマの歴史家の叙述について、検討したい<sup>(21)</sup>。ここではタキトゥスと同時代人で、彼より年下のスエトニウスの『ローマ皇帝伝』の中の『ネロ伝』を参照したい。

スエトニウスは、『ネロ伝』38節でローマ大火について述べているが、キリスト教徒の迫害については、16節で「新しく有害な迷信 (*nova et malefica superstitio*) の人類である、クリスチャン (*Christiani*) が処罰された」と述べている。このようにスエトニウスの記述では、ローマ大火とキリスト教徒の処罰が関係づけられていない。しかしこれは、スエトニウスの叙述法にも一因があると思われる。彼は皇帝伝を書く際、必ずしも年代順に叙述するのではなく、まずその皇帝の善行を列挙し、続いて彼の悪行について述べるという手法を取っており、キリスト教徒の処罰はネロの善政の一つとして、記述されている。それゆえここで述べられているキリスト教徒への処罰とは、大火後のキリスト教徒の処刑を指すとい

う解釈もある<sup>(22)</sup>。しかしショウは、この文が、ネロによる一連の贅沢や風紀の取り締まり政策—宴会での贅沢禁止、居酒屋で供される料理の制限、競走戦車馭者の乱行禁止、黙劇俳優と愛好者のローマからの追放—の中で言及されている事から、ここで述べられているネロのキリスト教徒への処罰も、これらと同様のレベルの処置であったと考える<sup>(23)</sup>。

それでは、ここで述べられている「クリスチャンの処罰」とは、具体的にどのようなものだったのだろうか。ショウはここで、スエトニウスの『クラウディウス伝』の中の、「彼(クラウディウス)は、クレストゥス(Chrestus)の煽動により、絶えず騒動を引き起こしていたユダヤ人を、ローマから追放した(『クラウディウス伝』25. 4)」という記述を参照する。「クレストゥス」については、大多数の研究者がこれを「キリストゥス(Christus)」と同定する<sup>(24)</sup>。すなわち、当時(おそらく49年頃<sup>(25)</sup>)のローマのユダヤ人の間では、キリスト信仰をめぐって対立や騒動が絶えず、そのためクラウディウスはユダヤ人をローマから追放した。ショウは、ネロの時代にも同様の出来事が起こり、キリスト教徒がローマから追放された、これがネロによる「クリスチャンの処罰」なのではないかと推測する<sup>(26)</sup>。

## ② Christiani と superstitio

それでは次に、タキトゥスの記述の問題について、検討していきたい。

ここで改めて言うまでもない事だが、タキトゥスは『年代記』15巻44節で、64年にローマで起きた出来事について述べている。しかし、彼の記述には所々、当時の状況を正確に述べていない個所が見られる。例えば、タキトゥスはイエスを処刑した属州ユダヤ総督ポンティウス・ピラトゥスの総督職を *procurator* と記述している。確かにタキトゥス自身の時代のユダヤ総督は *procurator* であったが、ピラトゥスがユダヤ総督であった30年代初め頃、ユダヤ総督職は *praefectus* であった<sup>(27)</sup>。また、この節の最後に出てくる「公共の利益 (*utilitas publica*)」という表現について、ショウはこれはネロの時代ではなく、タキトゥス自身の時代の考えを反映していると述べている<sup>(28)</sup>。

しかし、より大きな問題は、タキトゥスがここで描いているキリスト教徒の姿が、必ずしもネロ時代のものとは言えず、むしろ2世紀初めのローマ人のキリスト教徒に対する認識を反映していると思われる事である。特に問題なのが、先に引用したスエトニウスの記述にも出てきた「クリスチャン (*Christiani*)」と「迷信 (*superstitio*)」という言葉である。

まず、*Christiani* (複数形、単数形は *Christianus*) という呼称は、元々非キリスト教の側から、キリスト教徒をユダヤ教徒から区別する蔑称として用いられた。ショウは、ラテン語で *-anus* という接尾辞が、「～の子」—すなわち擬制的な親子関係にある者を指す事から、*Christianus* は「キリストの子」＝「キリストの追従者」を意味し、ローマの役人がキリスト教徒裁判において、好ましくない、怪しげな者として、キリスト教徒をこのように呼んだ

と述べている<sup>(29)</sup>。

キリスト教は元来、ユダヤ教の一分派として成立した。エルサレムで逮捕されたパウロが、ユダヤ人によって総督フェリクスに訴えられた時（56年頃）、彼は「ナザレ人の分派の首謀者（傍点筆者）」<sup>(30)</sup>と呼ばれている。また、成立期のキリスト教徒の数は、ユダヤ教徒と比べて圧倒的に少なかった<sup>(31)</sup>。そのため、特に非キリスト教の側から見て、キリスト教徒とユダヤ教徒の区別は極めて困難であった。

それゆえ、Christianusという言葉が、専らキリスト教徒を指す言葉として用いられるようになったのは、キリスト教が、非キリスト教の側から見ても、ユダヤ教とは異なる独自の宗教として区別できるほど成長した段階を示すと言える<sup>(32)</sup>。ローマ社会でこの言葉が使われたのが確かめられるのは、2世紀初め、タキトゥスやスエトニウスの時代からであり、ゆえにキリスト教が成立して間もない、1世紀半ばのネロの時代のキリスト教徒がChristianiと呼ばれているのは、時代錯誤である。ネロの時代のローマ人は、キリスト教徒とユダヤ教徒の区別がつかず、或いはキリスト教をせいぜいユダヤ教内のごく一部の分派と見なしていたと思われる。

次に「迷信 (superstitio)」という言葉について、検討したい。タキトゥスもスエトニウスも、キリスト教を「迷信」と呼んでいる。この「迷信」という言葉は、ローマでは一般に、非ローマ的或いは反ローマ的な外来宗教を指す言葉として用いられ、ユダヤ教を始めエジプトやシリアの東方宗教、更にガリア人のドルイド教やゲルマン人の宗教なども、全て「迷信」と呼ばれた<sup>(33)</sup>。それゆえ、キリスト教がここで「迷信」と呼ばれているのは、キリスト教もこれらの宗教と同様、反ローマ的な外来宗教と見なされたことを示す。

一方、スエトニウスはキリスト教を「新しい (nova) 迷信」と呼んでいる。また、タキトゥスは、「この有害極まりない迷信」の開祖が、ティベリウス帝時代に総督ポンティウス・ピラトゥスによって処刑されたクリストゥスという人物であると説明している。すなわち、スエトニウスもタキトゥスも、キリスト教がユダヤ教とは異なる新しい宗教であると認識している。

他方、タキトゥスはキリスト教がユダヤで発生し、またキリスト教徒が「人類憎悪」の罪で罰せられたと述べている。「人類憎悪 (odium humanum)」とは、特にユダヤ教に対して用いられた非難の言葉であった<sup>(34)</sup>。それゆえタキトゥスは、キリスト教がユダヤ教と共通する宗教であり、キリスト教がユダヤ教から派生したことも知っていたと思われる。

ところで、今まで述べてきたタキトゥスやスエトニウスの他に、2世紀初頭のローマ人とキリスト教の問題を考える上で、極めて重要な歴史史料として、二人の同時代人で、また共通の友人でもあった、小プリニウスの『書簡集』第10巻96が挙げられる<sup>(35)</sup>。この手紙は、プリニウスが小アジア北部の属州ビテュニア＝ポントウスの総督在任中に起きたキリスト教



徒裁判について、当時の皇帝トラヤヌス帝にあてた報告と問い合わせであり、113年（一説では110年）1月に書かれたと推定される。ここでプリニウスは、自分は今までキリスト教徒に関する裁判（cognitio de Christianis）に関わった事がなく、この問題に関して彼自身は無知であるゆえに<sup>(36)</sup>、皇帝の指図を仰ぎたいと述べた後、彼が携わったキリスト教徒裁判に関して報告している。その中でプリニウスは、彼はキリスト教徒に対する訊問からは、「ひねくれた、度外れた迷信（supetstitio prava et immodica）」以外は見出さなかったと述べている。

このように、対象とするキリスト教徒の時代が異なっているとは言え、キリスト教徒に関するタキトゥス、スエトニウス、小プリニウスの記述がいずれも似通っている事について、ショウは彼らの間でキリスト教徒に関する情報交換の可能性を示唆する<sup>(37)</sup>。彼らは、いずれもローマの上層階級に属し、同じような経歴を経験している。また『書簡集』からは、彼らが互いに親しい交友関係にあったことが窺えるが、これらの手紙の中には、プリニウスがタキトゥスの著作のために、資料となる情報を提供している手紙も見出される。79年に起きたウェスウィウス火山の大噴火に巻き込まれた、彼の伯父大プリニウスの遭難の様子を伝えるタキトゥスあての手紙（『書簡集』6. 16）は、その一例である<sup>(38)</sup>。

それゆえタキトゥスが、ネロの時代のキリスト教徒迫害の叙述において、プリニウスのキリスト教徒裁判の情報を参照した可能性は、ないとは言えないだろう<sup>(39)</sup>。タキトゥスの描くキリスト教徒の描写が、必ずしも1世紀半ばのネロの時代と合致していないように思われる背景には、このような要因があるのではないだろうか。

以上見てきたように、ローマ人の支配階層が、キリスト教を他の宗教と区別される新しい宗教として認識し、キリスト教に対して特別に対応するようになるのは、2世紀初め以後の事であり、先に述べたトラヤヌス帝あてのプリニウスの手紙に対する、トラヤヌスの返書（『書簡集』10. 97）が最初の例である<sup>(40)</sup>。それ以前の時代には、こうした認識は史的には認められない。それゆえ、もしキリスト教が成立して間もない1世紀半ばに、特にキリスト教徒だけを対象にネロによる迫害が行われたとするならば、ローマ帝国とキリスト教の歴史の全体の流れの中で、この迫害だけが孤立してしまい、不自然であるとショウは主張する<sup>(41)</sup>。

### 本論3 キリスト教の著作家による叙述の問題

次に、古代キリスト教の著作家が、「ネロの迫害」をどのように叙述しているか、検討したい。先に述べたように、大多数のキリスト教の著作家達は、ネロの迫害とローマ大火を結びつけてはいない<sup>(42)</sup>。ここではまず、4世紀のキリスト教の歴史家エウセビオスの『教会史』2. 25. 3～5を引用したい。

これらすべてに加えて、彼（ネロ）は皇帝の中で最初に、神に対する敬神の敵と宣言されたことを、彼の項に書き加えねばならない。（中略—テルトゥリアヌス『護教論』5.3の引用）さてこうして、彼は多くの偉大な人々の中で第一の神の敵と宣言され、使徒たちに対する殺害にまで昇じた。パウロはネロの治下、ローマで斬首され、ペトロも同様に十字架に付けられたことが伝えられる（弓削達訳）<sup>(43)</sup>。

次に、エウセビオスと同時代人で、護教家のラクタンティウスによる、ネロの迫害についての記述を参照したい。

ネロは、ローマのみならず、至る所で毎日、大多数の人々が偶像礼拝から離反して、古い宗教が非難され、新しい宗教へと移っていることに気づいた時、彼は忌まわしい邪悪な暴君だったので、神の聖所が粉碎され、正義（正しい信仰）が破壊されるべく突き進んだ。彼は、すべての者のうち、初めて神の僕たちを迫害し、ペトロを十字架に付けた。そしてパウロを殺した（『迫害者たちの死について』2.6、拙訳）<sup>(44)</sup>。

以上のように、ネロの迫害を伝えるこれらの記述においては、いずれもローマ大火について述べられていない。また、ここで述べられているキリスト教徒迫害の内容としては、専らペトロとパウロの死だけが挙げられている<sup>(45)</sup>。一方で二人とも、303年から始まる最後の「大迫害」のきっかけとして、ニコメディアの宮殿で火災が発生し、これにキリスト教徒が放火したという噂が広まり、多くのキリスト教徒が殺されたという事件を伝えており<sup>(46)</sup>、特にラクタンティウスは、ガレリウスが、慎重なディオクレティアヌスを迫害に向けさせるために、二度にわたって宮殿に放火したと述べている。これに関してショウは、ラクタンティウスがタキトゥスの作品を知っていた可能性は高いと思われるにも関わらず、彼が、この最後の迫害に対応するネロの最初のキリスト教徒迫害について述べている個所で、ローマ大火には全く触れていない事に注意を促している<sup>(47)</sup>。

ところでエウセビオスは、上に挙げた引用文の中で、ネロを「神に対する最初の敬神の敵」、或いは「第一の（＝最初の）神の敵」と呼んでいる。なぜネロは「第一の神の敵」と呼ばれたのだろうか。これについては、ネロが最初にキリスト教徒を迫害したから、という答えが考えられるかもしれない。しかし、エウセビオスの記述では、ネロは初めてキリスト教徒を迫害したから「神の敵」とされたというよりも、むしろ彼は「神の敵」だったゆえに、キリスト教徒を迫害した、というように解釈できるように思われる。ではなぜネロは「第一の神の敵」と言われたのだろうか。この言葉にはどのような意味があるのだろうか。

ネロは68年6月に自殺したが、その後間もなく、ネロは死んでいないという噂が広まり、



69年3月には東方でネロを名乗る偽者が現れ<sup>(48)</sup>、その後も80年代末まで、こうした「偽ネロ」の出現が相次いだ<sup>(49)</sup>。これについてスエトニウスは、次のように述べている。

ネロは32歳の年に、かつてオクタウィアを殺害したその日に亡くなった。

世間は大いに喜びはしゃぎ、庶民がフェルト帽（奴隷解放の象徴）をかぶって都中を駆け回ったほどである。しかし長い間、春や夏の花を供えてネロの墓を飾る人が後を絶たなかった。中には、彼の高官服を着た像を中央広場へ運び演壇の上に置いたり、時には、まだ生きているかのように、ネロの布告を出し、間もなくローマに帰って政敵に大きな禍をもたらそう、と公言する人もいた。（中略）実際死後二十年も経って、私の青年のころ、身元不詳の人物が「自分はネロだ」と名乗り出た。ネロの名はパルティア人の間で非常に好意を持たれていたもので、その男は熱烈に支持され、やっとのことで当局へ引き渡されたほどである（『ネロ伝』57. 國原吉之助訳）<sup>(50)</sup>。

このように、ネロの死後も民衆や外国人の間では、ネロ人気が根強く残り、彼らの間では、ネロは東方に逃れて権力を回復し、いずれはローマに攻め上って現体制を打倒するという、いわゆる「ネロ伝説」が流布するようになった<sup>(51)</sup>。しかしこうした「伝説」は、反ネロの立場にあった人たちにとっては、脅威と受け止められた。

以上のような「ネロ伝説」は、当時のユダヤ教の終末思想にも影響を与えた<sup>(52)</sup>。ネロの治世下、66年にユダヤ人のローマに対する反乱が起こり、この反乱は70年、ローマ軍によるエルサレム神殿の破壊で終結した（第一次ユダヤ戦争）。それゆえ、ユダヤ教徒はネロを神殿破壊と結びつけ、ネロを終末の時に出現する獣的な神の敵対者として描いた<sup>(53)</sup>。80年頃に成立したと推定される『シビュラの託宣』第4巻には、「母殺し」＝ネロに関して以下のような予告が見られる<sup>(54)</sup>。

エルサレムにもイタリアから戦いの恐ろしい嵐が到り、神の大いなる神殿を略奪する。それは人々が愚かしいことに従い、敬虔を捨て、神殿の前で憎むべき殺人を行う時にそうなる。そのころ、イタリア出の大いなる王が、奴隷のように、こっそり人知れずにエウフラテスの渡しを越えて逃げて行く。すなわち、憎むべき母殺しの罪とその他多くの事がよこしまな手で勝ち誇って行われている時に。多くの者がローマの王座の周りで大地を血で汚すだろう、彼の者が、パルティアの地を越えて逃れた後に。シリアにはローマの勇者がやって来る。彼は火でエルサレムの神殿を焼き払い、さらに多くのユダヤ人を殺し、幅広い道のある大いなる地を滅ぼすだろう。（中略）しかし、裂けてひそみとなっているイタリアの地から炬火が放たれ、広い天に達し、多くの町々を焼き、多くの人々を滅ぼし、大量のくすぶる灰が上空

を焦がし、また火の玉が紅土のように天から降る時、(中略) その時、引き起こされた戦いと闘争とローマの逃亡者とは西に到る。彼は長い槍を取り、無数の者たちと共にエウフラテスを渡る (『シビュラの託宣』 4. 115～139. 柴田有訳、傍点筆者)<sup>(55)</sup>。

ここではユダヤ戦争の勃発、ネロ後のローマの内乱、エルサレム神殿の破壊、ウェスウィウス火山の噴火といった事件と共に、ネロの東方への逃亡と、その後のローマへの再来が告知されている。

更にまた、2世紀初めごろと推定される『シビュラの託宣』第5巻では、「終わりの時」に「世界を狂気にする戦争」が起こり、「地の果てから母殺しがやって来て」、全てを支配すると予言されている (『シビュラの託宣』 5. 361～365)<sup>(56)</sup>。

このようなユダヤ教の終末観は、当時のキリスト教の黙示文学にも影響を与え、ネロは終末時に現れる「キリストの敵」と見なされた<sup>(57)</sup>。『預言者イザヤの殉教と昇天』<sup>(58)</sup>の中で、90年ごろ書かれたと推定される、この世の完成の時に現れるベリアル<sup>(59)</sup>の支配についてのイザヤの預言の部分では、次のように述べられている。

さて、ヒゼキヤならびに我が子ヨサブよ、この時こそはこの世の完成の時である。それが完成されると、大いなる者にしてこの世の王たるベリアルが降りてくる。彼はそれ(この世)ができた時以来これを治めてきたのであるが、その彼が不法の王、自分の母の殺害者—この王はそういう者なのである—の姿をとって彼の大空から降りてくる。彼は愛せられる者の12使徒が植えた樹を迫害する。12人のうちの一人(ペトロ)は彼の手にかかって殺されるであろう (『預言者イザヤの殉教と昇天』 4. 1～3. 村岡崇光訳、傍点筆者)<sup>(60)</sup>。

このように、ここではベリアルがネロと同一視され、彼の支配は1332日続き、その後主が天使たちと共に第七の天から到来し、ベリアルを滅ぼすと預言されている (4. 14)<sup>(61)</sup>。

また、新約聖書のヨハネの黙示録(90年代後半)13章では、終末時に現れる第二の反キリストの獣について述べられているが、最後にこの獣の名について、「ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は666である(18節)」と記されている。通説では、この数字はネロを意味するゲマトリアと解釈される<sup>(62)</sup>。

以上のように、1世紀末のキリスト教の黙示思想以来、ネロは終末時に、「地の果て」—すなわち東方から到来する反キリストと位置づけられ、ネロ治世下のペトロとパウロの死は、ネロの迫害による殉教と解釈される<sup>(63)</sup>。こうしてキリスト教の立場からのネロ暴君像が定着し、強調されるようになっていくのである。

## 結論—ショウの論文の意義と問題について

以上、我々はローマ大火とネロのキリスト教徒迫害に関する通説を否定するショウの論文の再検討を通じて、1～2世紀初め頃のキリスト教とローマ社会についての諸問題を考察してきた。最後に我々は、ショウの論文の意義と問題について、まとめてみたい。

ショウの論文は、細かい点でいくつかの問題点があるが<sup>(64)</sup>、全体として評価される点は、1～2世紀初頭のローマ人のキリスト教徒についての認識と、初期キリスト教の成立とユダヤ教からの自立の歴史との相関関係を明らかにしたことにある。すなわち、ショウの論文から明らかにされた事は、ローマ人がキリスト教を、「総督ピラトゥスにより処刑されたクリストゥス」を開祖とする、ユダヤ教と区別される「新しい迷信」と認識し、信者たちを「クリスチャン (Christiani)」と呼んだことが史料的に確かめられるのは、1世紀半ばのネロの時代ではなく、2世紀初めの事であり、このころから非キリスト教の側からも、キリスト教が独自の宗教として、認識されるようになったという事である。

一方、こうした認識の成立は、初期キリスト教のユダヤ教からの自立の歴史と対応している<sup>(65)</sup>。先に述べたように、元々キリスト教は、ユダヤ教の一派（ナザレ派）として成立し、その信者もユダヤ人が中心であった。パウロの「異邦人伝道」も、本来は地中海世界各地の「異邦人世界」に離散したディアスポラ・ユダヤ人に向けられた伝道活動であり、「異邦人」＝非ユダヤ人が最初から伝道の主対象であったわけではなかった。

キリスト教がユダヤ教から自立し、両者が各々別々の道を歩むようになるきっかけは、先述した、66～70年にかけてのローマに対するユダヤ人の反乱（第一次ユダヤ戦争）であった。この戦争でエルサレム神殿は破壊され、またサドカイ派やエッセネ派などのユダヤ教の諸分派が消滅し、戦後のユダヤ教は、律法を重視するファリサイ派によって再建された。律法は今や、神殿に代わってユダヤ教の基盤と位置付けられ、一方ファリサイ派以外の分派は、異端として排除された。その結果、キリスト教もユダヤ教から排除されたが、他方、これはキリスト教のユダヤ教からの自立を促した。

このように、キリスト教がユダヤ教から分かれて、独自の宗教として発展していくのは、1世紀末から2世紀以降の事であり、これは、先に見たように、ローマ人がキリスト教をユダヤ教とは異なる宗教と認識し、キリスト教徒をChristianiと呼ぶようになった事が、史料的に確かめられる時期と、ほぼ対応していると言えよう。

以上のようにショウの論文は、ネロのキリスト教徒迫害を伝えるタキトゥスの記述が、ネロの時代と言うより、むしろ2世紀初頭のローマ人のキリスト教観に基づいている事を明らかにしたが、最後に、ネロ時代におけるキリスト教徒迫害の可能性について、考えてみたい。

ショウが明らかにしたように、ネロのキリスト教徒迫害に関するタキトゥスの記述は、必ずしもネロ時代のキリスト教徒の実像を正確に伝えているとは言えないと思われるが、それ

では、ネロのキリスト教徒迫害自体は、全くのフィクションであったのだろうか。

先に述べたように、1世紀半ばのローマ人は、恐らくユダヤ教徒とキリスト教徒の区別は困難であったと推測されるが、しかし一方、既にクラウディウス帝の時代に、「クレストゥスをめぐる騒動」のために、ユダヤ人がローマから追放されるという事件が起こっていた<sup>(66)</sup>。それゆえ、当時のローマ人の中には、ごく一部のキリスト信奉者が、ユダヤ人の間に信仰をめぐる対立や分裂を引き起こしている事に気づいた者もいた可能性はある。またネロ自身は、恐らく妃ポッパエアの影響から、当時のユダヤ教について、ある程度の知識があり、ユダヤ教内の一部の「不穏分子」の存在も知っていたかも知れない<sup>(67)</sup>。

ローマ大火とキリスト教徒迫害の関係については、ネロが放火を命じたという噂が立ち、そのためネロが他に「放火犯」を立てる必要に迫られていた事は、ショウも恐らく事実だろうと認めている<sup>(68)</sup>。そのためにキリスト教徒が「放火犯」として処刑された可能性は、タキトゥスが伝えているほどの規模ではないとしても、全くなかったとは言いきれないように思われる。他方、我々は多くのキリスト教の作家が、ネロの迫害について述べる際、ローマ大火に全く触れていない事にも注意しなければならない<sup>(69)</sup>。

## 注

- (1) B. D. Shaw, 'The Myth of the Neronian Persecution', *Journal of Roman Studies* 102, pp. 73~110. C. P. ジョーンズは、*New Testament Studies*, 63において、ショウの説を批判している (C. P. Jones, 'The Historicity of the Neronian Persecution: A response to Brent Shaw', *New Testament Studies* 63, 2017, pp. 146~152.)。まずジョーンズは、ショウが「クリスチャン」という呼称は、2世紀初めまで見られなかったという説に対して、使徒言行録11章26節では、バルナバとパウロの第1回伝道旅行前(40年代初め)に、アンティオキアで「クリスチャン」という呼称が起こったと書かれていると主張している。これについては本稿注(32)参照。また、ショウは60年代のローマ市のキリスト教徒について、彼らの存在は、ローマ市在住のユダヤ人社会の中では目立つ存在ではなかったと主張するが、ジョーンズは、パウロがローマの信徒への手紙1章8節で、ローマ教会の信仰が「全世界に言い伝えられている」と書いていることから、当時のローマ教会はよく知られていたと主張する。しかし、最初期のローマ市のキリスト教の教会は、ローマ市のユダヤ人居住区にあった。また、当時のローマ市におけるユダヤ人の人口は約15,000~20,000人程度と推定されるが、これに比べてキリスト教徒の数は、圧倒的に少数であった。ローマの信徒への手紙16章における個人々人への挨拶の列挙は、ローマ教会の信徒が互いに顔見知り

であったことを暗示する。保坂高殿は、当時のローマ市のキリスト教徒の数を、多く見積もっておよそ300～350人程度と推定している（保坂高殿『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』教文館、2003、p. 280）。

- (2) Shaw, *op. cit.*, pp. 96～97.
- (3) *Ibid.*, p. 75. これについては更に注(9)参照。
- (4) *Ibid.*, pp. 75～76, 94.
- (5) 使徒言行録15章9～11節
- (6) ガラテヤの信徒への手紙2章11～14節
- (7) ヨハネによる福音書21章15～19節
- (8) 「ペトロ、この人は不正な嫉妬にゆえに、一度二度ならず幾多の苦難を忍び耐え、こうして証を立てた上で、彼に相応しい栄光の場所へと赴いた。嫉妬と諍いのため、パウロは忍耐の賞に至る道を示した。彼が東方においても西方においても、福音の説教者として登場した時、七度鎖に繋がれ、追い払われ、石にて打たれたのだったが、そのため彼はその信仰の栄ある誉を得たのだった。彼は全世界に義を示し、西の果にまで達して為政者達の前で証を立てた。かくして世を去り、聖なる場所へと迎え上げられたのだ—忍耐ということの最大の範例となって」（小川陽訳、荒井献（編）『使徒教父文書』講談社文芸文庫、1998、pp. 86～87.）
- (9) 「その教会は如何に幸せなことか。そこに使徒たちは、彼らの血と共に、すべての教えを惜しみなく与えた。そこで、ペトロは主の受難と等しくされ、そこで、パウロは（洗礼者）ヨハネの処刑により冠で飾られる。」（拙訳、Shaw, *op. cit.*, p. 75.）
- (10) 「ペトロはポントやガラテヤ、ビテュニヤ、カッパドキア、アジアなどでディアスポラのユダヤ人に宣教したと思われるが、最後にはローマに来て、十字架にさかさまにかけられた。彼がそのような仕方でも受難を要求したからである」（エウセビオス、秦剛平訳『教会史（上）』講談社学術文庫、2010、p. 241.）
- (11) これについては、本論文53～54ページ参照。
- (12) 荒井献（編）『新約聖書外典』講談社文芸文庫、1997、pp. 225～233. ショウは『ペトロ行伝』の著作年代を4世紀後半～5世紀としているが、一般的には180～190年頃に書かれたと推定されている（Shaw, *op. cit.*, p. 75.）。
- (13) *Ibid.*, pp. 76, 94.
- (14) *Ibid.*, pp. 76～78, 93.
- (15) 使徒言行録21～28章
- (16) 使徒言行録28章30～31節
- (17) *Ibid.*, p. 78.

- (18) *Ibid.*, pp. 78, 93.
- (19) タキトゥス、國原吉之助訳『年代記（下）』岩波文庫、1981、pp. 269～270.
- (20) タキトゥスの記述に依拠している作家としては、5世紀ごろのキリスト教の作家スルキピウス・セウェルスとオロシウスが挙げられる。Shaw, *op. cit.*, p. 83.
- (21) 3世紀のローマ史家ディオ・カッシウスは、ローマ大火については詳しく述べているが、キリスト教徒迫害については全く触れていない。Shaw, *op. cit.*, p. 82.
- (22) 弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』日本基督教団出版局、1981、p. 114.
- (23) Shaw, *op. cit.*, p. 83.
- (24) Chrestusについては、J. G. Cook, *Roman Attitudes Toward the Christians*, Zürich, 2010, pp. 14～22; Shaw, *op. cit.*, pp. 84～86.
- (25) パウロは第2回伝道旅行中、50年秋にコリントにやって来た時、クラウディウスによるローマからのユダヤ人追放令により、最近ローマからコリントに移住してきたアキラとプリスキラという名のユダヤ人夫婦と出会っている（使徒言行録18章1～2節）。なお、ディオ・カッシウスは、クラウディウスによるユダヤ人の追放を、彼の治世始めの41年としている（『ローマ史』60. 6. 6）。
- (26) Shaw, *op. cit.*, p. 84.
- (27) *Ibid.*, pp. 86～87.
- (28) *Ibid.*, p. 87. しかし弓削達は、ネロの師であったセネカの『寛容論』において、「公共の利益」と「残忍さ」の対比が見られると指摘している（弓削、前掲書、pp. 106～107）。
- (29) Shaw, *op. cit.*, p. 87.
- (30) 使徒言行録24章5節
- (31) 1～2世紀初頭のキリスト教徒の数については、ある推計では1世紀半ばで1000～1400人程度、100年で7500人程度と見積られている（R. Stark, *The Rise of Christianity*, Princeton, 1996, pp. 6～7.）。一方、ローマ帝国内のユダヤ人の数は数百万人と推定されている。これについては、島創平「ネロとキリスト教再考」『東洋英和女学院大学大学院 大学院紀要』11、2015、p. 7参照。
- (32) キリスト教徒がいつからChristianusと呼ばれるようになったか、という問題については、島、前掲論文 p. 7. 使徒言行録11章では、バルナバとパウロがアンティオキアに1年間滞在した事を述べた後、26節で「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者 (Christianos) と呼ばれるようになったのである」と述べられており。これは40年代の事であるという解釈がある。しかし、ここではアンティオキアで弟子たちが「クリスチャン」と呼ばれるようになったと述べられているだけで、その時



期がバルナバとパウロのアンティオキア滞在の時と一致するとは述べられてはいない。一方、ポンペイ出土の碑文の中に Christianus の使用例が見られ、これは 79 年以前の物であると言われるが、ショウはこれは疑わしいと考える (Shaw, *op. cit.*, pp. 88～89)。

- (33) これについては島創平「なぜキリスト教は『有害な迷信』とみなされたか—ローマ人とキリスト教」『東洋英和女学院大学大学院 大学院紀要』16、2020、pp. 1～9 参照。
- (34) *odium humanum* については Cook, *op. cit.*, pp. 63～65.
- (35) これについては弓削達、前掲書、pp. 33～67 参照。
- (36) ショウは、もし 64 年にローマ大火の際、キリスト教徒が罰せられた事が事実ならば、プリニウスがここでキリスト教徒裁判について、何も知らないと述べているのはおかしいと述べている (Shaw, *op. cit.*, pp.90～91.)。
- (37) *Ibid.*, p. 91.
- (38) この手紙の冒頭で、プリニウスはタキトゥスにあてて、「あなたは、私の伯父の死についてできるだけ正確に後世に伝えることができるようにと、私にそれを手紙で書くようにお求めです。ありがたいことと存じます。と申しますのは、彼の死はそれがあなたによって執筆されて公にされますならば、不死の栄光が与えられることになる」と私は考えるからです (『書簡集』6. 16. 1)」と述べている (弓削達『素顔のローマ人』河出書房、1975、p. 208. 傍点筆者)。
- (39) Shaw, *op. cit.*, p. 91. タキトゥスの『年代記』の執筆年代は、一説では 115～117 年頃と言われる。
- (40) これについては、弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』pp.56～65 参照。
- (41) Shaw, *op. cit.*, pp. 96～97.
- (42) 注 (20) 参照。
- (43) 弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』p. 118.
- (44) Shaw, *op. cit.*, p. 93.
- (45) *Ibid.*, p. 93.
- (46) エウセビオス『教会史』8. 6. 6～7; ラクタンティウス『迫害者たちの死について』14.
- (47) Shaw, *op. cit.*, p. 93.
- (48) タキトゥス『同時代史』2. 8～9. 以下の問題については E. Champlin, *Nero*, London, 2003, pp. 9～20; Shaw, *op. cit.*, pp. 94～95.
- (49) 第二の「偽ネロ」は 79/80 年頃現れた (カッシウス・ディオ『ローマ史』66. 19. 3)。三番目の「偽ネロ」については注 (50) 参照。

- (50) スエトニウス、國原吉之助訳『ローマ皇帝伝（下）』岩波文庫、1986、pp. 197～198. ここで言及される「偽ネロ」は、88/89年頃に現れた。
- (51) Shaw, *op. cit.*, p. 95.
- (52) 以下の問題についてはH. O. Maier, 'Nero in Jewish and Christian Tradition from the First Century to the Reformation', in E. Buckley and T. Dinter (eds), *A Companion to the Neronian Age*, Oxford, 2013, pp. 385～388.
- (53) Shaw, *op. cit.*, p. 95.
- (54) 『シビュラの託宣』は、元来ギリシア・ローマ世界の巫女による未来の予言、託宣集であったが、後に未来の予言集として、ディアスポラのユダヤ人社会に受け入れられ、前2世紀から後2世紀頃にかけて、ユダヤ人による『シビュラの託宣』が書かれ、キリスト教にも影響を与えた。
- (55) 左近淑他訳『聖書外典偽典第三巻 旧約偽典 I』教文館、1975、pp. 183～184.
- (56) 同上、p. 198.
- (57) 以下の問題についてはMaier, *op. cit.*, pp. 388～389; Shaw, *op. cit.*, p. 95.
- (58) 『預言者イザヤの殉教と昇天』は、元来前100年頃に成立したユダヤ教の殉教者伝に、後1世紀末にキリスト教の黙示文学が加わって成立した。
- (59) 「ベリアル」は元来「悪意」、「墮落」を意味する言葉で、「神に敵対するもの」、「サタン」の意味で用いられる。
- (60) 荒井献他訳『聖書外典偽典 別巻 補遺II』教文館、1982、pp. 184～185.
- (61) 同上、p. 185.
- (62) 佐竹明『ヨハネの黙示録 下巻（現代新約注解全書）』新教出版社、2009、pp. 113～116.
- (63) Shaw, *op. cit.*, p. 96.
- (64) 本稿注（12）、（28）参照。
- (65) 以下の問題については島創平「『多神教』社会の中の『一神教』」、地中海文化を語る会編『ギリシア・ローマ世界における他者』彩流社、2003、pp. 332～354; 島「ネロとキリスト教再考」pp. 1～9参照。
- (66) 本論文p. 51参照。
- (67) 島「なぜキリスト教は『有害な迷信』とみなされたか」pp. 7～8参照。
- (68) Shaw, *op. cit.*, p. 91.
- (69) このことは、ローマ大火におけるネロのキリスト教徒迫害が、キリスト教の作家の心を引くほど大規模ではなかったことを示すと言えるかもしれない。

## 参考文献

### 1. 邦文文献

- 荒井献（編）『新約聖書外典』講談社文芸文庫、1997年  
荒井献（編）『使徒教父文書』講談社文芸文庫、1998年  
荒井献他訳『聖書外典偽典 別巻 補遺II』教文館、1982年  
エウセビオス、秦剛平訳『教会史』講談社学術文庫、2010年  
左近淑他訳『聖書外典偽典第3巻 旧約偽典I』教文館、1975年  
佐竹明『ヨハネの黙示録 下巻（現代新約注解全書）』新教出版社、2009年  
島創平「『多神教』社会の中の『一神教』」、地中海文化を語る会編『ギリシア・ローマ世界における他者』彩流社、2003年、pp. 332～354.  
島創平「ネロとキリスト教再考」『東洋英和女学院大学大学院 大学院紀要』11、2015年、pp. 1～9.  
島創平「なぜキリスト教は『有害な迷信』とみなされたか—ローマ人と宗教」『東洋英和女学院大学大学院 大学院紀要』16、pp. 1～9.  
スエトニウス、國原吉之助訳『ローマ皇帝列伝（下）』岩波文庫、1986年  
タキトゥス、國原吉之助訳『年代記（下）』岩波文庫、1981年  
保坂高殿『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』教文館、2003年  
弓削達『素顔のローマ人』河出書房、1975年  
弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』日本基督教団出版局、1981年

### 2. 外国語文献

- E. Champlin, *Nero*, London, 2003.  
J. G. Cook, *Roman Attitudes Toward the Christians*, Zürich, 2010.  
C. P. Jones, 'The Historicity of the Neronian Persecution: A Response to Brent Shaw', *New Testament Studies* 63, 2017, pp. 146-152.  
H. O. Maier, 'Nero in Jewish and Christian Tradition from the First Century to the Reformation' in E. Buckley and T. Dinter (eds), *A Companion to the Neronian Age*, Oxford, 2013, pp. 385-404.  
B. D. Shaw, 'The Myth of the Neronian Persecution', *Journal of Roman Studies* 102, pp. 73-110.  
R. Stark, *The Rise of Christianity*, Princeton, 1996.

# The Myth of “Neronian Persecution”

— Concerning B. D. Shaw’s Thesis

SHIMA Sohei

It is a commonly accepted view that Nero persecuted Christians for charge of arson and St. Peter and St. Paul were martyred in the time of Great Fire of Rome. However, B. D. Shaw denied that common view. There is no definite historical evidence that Peter and Paul were martyred in Rome because of Nero’s persecution.

There are no other documents than the Tacitus writing that relates the Great Fire of Rome with the persecution of Christians. Although Tacitus called those who believed in Jesus Christ “Christiani,” that naming was not common in the reign of Nero, i.e., AD60s. During the reign of Nero, Romans could hardly distinguish the Christians from the Jews.

Early Christian writers often called Nero as “the enemy of the God.” After Nero killed himself, the legend arose that Nero did not die and would come back from the East to Rome. Such image of Nero influenced the literature of the Apocalypse of Judaism and Christianity. And that image also placed Nero in the position of the “enemy of the God” and “Antichrist” who would appear at the end of the world.